卒業後の豊かな生活を見据えた
コミュニケーション力を育む実践

熊本県立盲学校　寄宿舎指導員　村上　豊作

1　はじめに

（1）研究主題（テーマ）の設定理由

私たちが周りの人とよりよく関わるためのスキルとして、コミュニケーション能力が大切だと考える。中でも情報コミュニケーションにおいては、自分の考えや価値観といった情報を相手とやり取りするため、以下のような力が求められる。

ア　観察する
イ　信頼関係を構築する
ウ　傾聴する
エ　質問する
オ　共感する
カ　伝達する

上記をこまかく見ていくと、果たして児童生徒同士あるいは職員との会話の場面において、主体的なコミュニケーションはどれほど成立しているのかという疑問が生じた。

また、本校は令和元年度より３カ年の研究（テーマ「社会での豊かな生活を見据えたコミュニケーション力を育む授業実践」）を始め、寄宿舎でも「コミュニケーション力の育成」をテーマに、集団生活のあらゆる場面で取り組むことにした。

（2）研究仮説

研究初期の段階として、職員研修（ＫＪ法）や保護者・担任との情報交換、児童生徒の日常生活の観察をもとに以下のような実態が把握できた。

ア　「やってもらって当たり前」の気持ちがある。
イ　表現力が乏しい。
ウ　不満が多い。
エ　経験不足、憧れの人がいない、目標がない。
オ　自己防衛の術が身についている。
カ　人間関係上の疎外感や困り感に対する危機感がない。
キ　生活力と社会性が比例しない。

※　補足説明

「ア」の原因は、必要以上に職員が手を出し過ぎている（かもしれない）。
「イ」は、今それを学んでいるので仕方がない（のもしれない）。
「ウ」の原因は、職員の説明不足や思春期であるが故の反発である（かもしれない）。
「エ」は、大人である私たちが提示できていない（のかもしれない）。
「オ」は、誰も守ってくれない、あるいは信頼できる人が少ない（のかもしれない）。
「カ」は、小規模学校で最終的に大人（職員）が助けるから（かもしれない）。

「キ」は、大人（職員）相手の会話が多いため、当然ながら実際の経験や技術よりも知識・言語が先行してしまっている（のかもしれない）。

以上の実態から、「寄宿舎生活において、異年齢の交流を積極的に行うことで、コミュニケーション力が育まれるのではないか」という仮説を立て研究を進めた。

（３）研究方法と評価方法

研究を進めるにあたり、本校寄宿舎には自治会（以下、双葉会）があるため、既存の行事・活動を中心に、寄宿舎生活に支障がない範囲で取り組むことにした。

また、評価の観点としては、双葉会活動に対する感想や日常会話の広がりに重きを置き、職員は最小限のきっかけを作ることに専念し、児童生徒間の自発的な会話を促した。

（４）研究計画と経過

経　　過	研　　究　　内　　容
令和元年度（研究１年目）	実態把握、自治会活動の推進
２年度（　〃　２年目）	自治会活動・人権教育の推進、中間とりまとめ
３年度（　〃　３年目）	実践内容の再構築、各分野の実践推進、まとめ
４年度（※実践継続）	ＧＩＧＡスクール構想（ＩＣＴ利活用）の推進
５年度（※実践継続）	人権教育・地域交流の推進、自己管理（セルフケア）

令和元年度からの３年間は、学校全体の研究として取り組み、令和４年度以降は寄宿舎での実践として継続している。

２　実践の概要

（１）研究１年目（令和元年度）

寄宿舎の自治会（以下、双葉会）主催の活動として、茶話会や十五夜Ｎｉｇｈｔ等のイベントを開催した。当日は、通常の指定席ではなく男女混合の座席とし、日頃は接する機会が少ない舎生とも会話を楽しんでいる様子をうかがうことができた。

仮説のとおり、様々な場面において成人舎生の言葉使いやコミュニケーション方法が良いお手本となり、学齢舎生が真似をする姿が見られるようになったが、感染症の影響で、対面でのコミュニケーションの取り方について見直す必要性が出てきた。

（２）研究２年目（令和２年度）

コロナ禍において、新しい生活様式の下でのスタートとなり、ソーシャルディスタンスや施設の利用制限、複数人での飲食自粛等の感染防止対策により、舎生同士の関わる機会が減った。

一方で、コミュニケーションの壁を感じながらも、集団生活の場での「伝える・つながる」ための方法については職員間で協議・試行を続け、舎生同士の直接的なコミュニケーションは一旦控えつつ、職員との会話で新しいスキルの向上に重点を置いた。館内放送や玄関モニ

ターを利用してニュースや音楽、芸能・エンタメ等の情報を発信したことで、職員に話しかけてくる舎生も増え、同時に会話時の距離や身体の向きも学ぶことができた。

また、女子棟においてはコミュニケーション力に課題のある生徒にスポットを当て、学部と連携しながら外部機関への相談も行った。結果として、直接的なコミュニケーションの機会は減ったものの、コミュニケーションを育むための環境整備や手段・方法の幅を広げるという意味では、とても充実した時期であった。職員が児童生徒の思いを引き出すノウハウを学ぶことで寄宿舎内での会話を活性化し、自発的な会話へとつなげていきたい。

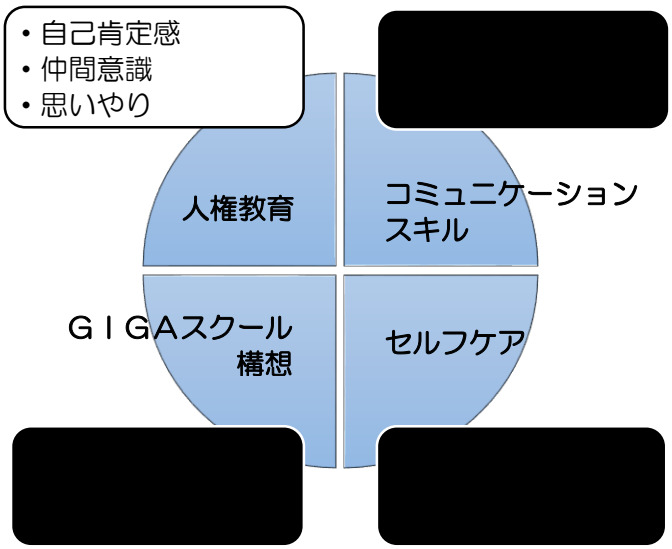
２年目の集大成として、年度末も迫った時期に開催した卒業生を送る会での、録音・放送による卒業生のメッセージを以下に紹介する。

> 舎のみんなが慕ってくれて、楽しい３年間でした。自分より年下の子ばかりだったけど、すごく学ぶことが多くて、自分が視覚障がい者として生きていくための知恵だったり、技術だったり、こちらが学ぶことがすごく多かったです。
>
> それから、自分が大学受験の際、やるべきことや覚えることが多くていっぱいいっぱいだった時、舎の先生方に気を遣っていただき、陰で動いてもらっていたことは気づいていました。この場をもって「ありがとうございました」と言いたいです。
>
> 最後に、自分達にはハンデは大きいけれど、いろんな夢を描いて努力することは、たとえ報われなくても、努力している姿はみんなが見ていて、周りの先生方、友達、みんながサポートしてくれるので、たくさん夢を持ってください。未来は明るいです。

この素敵なメッセージから、我々が立てた仮説とアプローチの方法は少なからず間違いではなかったと認識でき、卒業生にはしっかりと伝わっていたことに感動を覚えた。

（３）研究３年目（令和３年度）

研究の最終年は、まず右図のように過年度の実践内容を再構築し、各分野での達成目標を設定することで、担当部（者）の組織的な実践を心がけた。



また、舎生理解に向けた取り組みとして、全職員による討論会（テーマ：舎生のコミュニケーションを育むためにはどうすればよいか）を開き、特に自分の担当舎生に関する具体的な声かけや支援の方向性を明確にできるよう試みた。

さらに、４つに再構築した方向性（人権教育・コミュニケーションスキル・ＧＩＧＡスクール構想・セルフケア）について、担当舎生の課題をブレインストーミング法を用いて書き出し、それらのアプローチ法について相談し合った結果、接し方や成功例などが活発に意見交換された。以下に分野ごとの成果を挙げてみる。

ア　人権教育の分野

新しい生活様式の中で、お互いが分かり合い、共感し合うコミュニケーション力の育成

をめざした。併せて、コミュニケーション時のソーシャルディスタンスも相手への思いやりと捉え、舎生それぞれに意識と工夫を促した。

相手を知るために企画した「人権リレーインタビュー」は、当初は自己紹介が多かったものの、回を重ねるごとに「人と接する時に気をつけていることは？」など、相手への思いやりにつながる質問も聞かれるようになり、舎生同士の会話の中に人権意識の高まりを感じることができた。

イ　コミュニケーションスキルの分野

コロナ禍において舎生が楽しめる行事のあり方について考えた。これまで、寄宿舎生活の楽しみの一つとして、あるいは舎生同士をつなげる機会として大切にしてきた双葉会行事であったが、コロナ禍での開催が叶わず中止を余儀なくされていた。

しかしながら、新しい生活様式の定着と感染症対策の徹底に伴い、制限はありながらもみんなで楽しめるイベントの形も見え始めた。その一つとして開催した「ビンゴ大会」では、各部屋を拠点にしつつも、マイクパフォーマーによる実況とスピーカーによるＢＧＭ、学校全職員からの寄贈により実現した景品の提供等、一堂に会さなくとも一つになれる雰囲気を作り出すことができた。

司会の盛り上げる声、ビンゴが揃った時の声、なかなか揃わずがっかりした声、廊下伝いや部屋の壁越しに聞こえてくるそれぞれの声を聞き分けながら、相手の様子を知る手段を一つ学ぶことができた取り組みであった。

ウ　ＧＩＧＡスクール構想

様々な手段を使い分け、コミュニケーションの幅を広げることを目的とした。職員研修はもとより、知り得た知識や技術を舎生に伝え示し、使用できる環境も整いつつある。

玄関モニターからの情報発信に加え、ＷＥＢ会議の環境を整えることで、双葉会役員会や行事の打合せも実施できた。

エ　セルフケアの分野

高等部生に係る話し合いの中で、自己管理や自己解決という言葉を耳にする。自分のことは自分でできることが望ましいが、気持ちの整理や適切な言葉が見つからず、その場に止まっている生徒は少なからずいる。加えて小規模なため、学校でも寄宿舎でも常に同じ顔ぶれで生活するとなると、寄宿舎の自室以外、安心できる空間はないに等しい。

初めての試みで手探りの部分も多いが、お互いのことを知ると同時に、自分自身にも目を向け、ストレスやその対処法について学んでいきたい。

（４）令和４年度の取り組み（※実践継続）

研究３カ年を引き継ぐ形で、ＩＣＴ及びクラウドの利活用を前提としたコミュニケーションやプレゼンテーションの実践を推進したが、背景には、全国的にＩＣＴを利活用した実践例が紹介されていく中、それらに関する理解度や使用頻度の低さがあった。

本校でも「ｚｏｏｍ」「ｍｅｅｔ」「ｃｌａｓｓｒｏｏｍ」等の研修や、実際にそれらを使った会議や連絡も実践されているが、つい電話や連絡帳に頼ってしまう傾向にあり、「必ずしも使わなくても…」と必要性を感じていない部分が課題として残った。

確かに、強い必要性を感じるにはもうしばらく時間が必要かもしれないが、「ある日突然、生活の様式が変わってしまった」経験を思い返すと、コミュニケーション手段・方法の引き出しを増やし、使いこなすことは大切だという結論に至った。

また、このことに類する今日の問題点として、ＳＮＳにまつわるトラブルが挙げられる。いじめや不登校、誹謗・中傷や誤解等々の事案は見られないものの、言葉足らずや意味の取り違えによる対人トラブルはよく見られる。ＩＣＴの利活用と併せ、大人も子どもも心のこもった言葉の選択・使い方について共に学んでいかなければならないと強く感じている。

その他、地域交流を兼ねた「キッチンカーイベント」を紹介する。午後放課の帰省日をねらって、人とのつながりを学校内から生活圏である寄宿舎周辺に広げようと、近隣店舗に呼びかけてキッチンカーイベントを開催した。

通学生やその保護者、学校職員、そして寄宿舎生の迎えに来られた保護者を交え、大盛況のうちに会を終えることができた。新しく知り合うこと、自分から話しかけること、普段と違う雰囲気で話をすること等、楽しみながらたくさんの方と会話できたことが一番の収穫であった。私たち職員も、日頃接点の少ない通学生やその保護者とも話す機会を持つことができ、有意義な時間を過ごすことができた。

※　会話の状況（参加者の声）

寄宿舎生の保護者「座って懇談するより立ち話の雰囲気が話しやすかった」
「子どもの寄宿舎での友達と会えてよかったです」

通学生の保護者　「寄宿舎生っていいですね、うらやましいです」
「通学生も招待してもらえて楽しんでいます」

キッチンカー店員「この前ご来店いただいた方があいさつしてくれました」
「先生方を見ていると、どこをお手伝いすればいいかわかります」

お互いを知り、理解し合い、関係を築いていくことで安心感を得る。将来の生活拠点を中心に、身近に理解者がいることは心の支えになる。自分からきっかけを作り、交流の幅を広げていけるよう、今後も続けていきたい。

（５）令和５年度の取り組み（※実践継続）

実践継続の２年目である今年度は、寄宿舎生活の中に人権教育の観点をより盛り込んでいきたいと考えている。６月は「心のきずなを深める月間」でもあるため、いじめ未然防止に向けた取り組みとして、まずは「相手を知る」「相手に知ってもらう」ことを重点に、人権教育担当者の発案で進んでいる。

取り組みのテーマは、『キラリと光る素敵なところ、見つけて、知って、話してみよう～いつも君に　ずっと君に　笑っていてほしくて～（※作詞：秦基博「ひまわりの約束」より引用）』に決まり、児童生徒とその担当職員の企画を夕食後に放送する。寄宿舎生同士はもちろん、私たち職員のことも知ってもらう良い機会として、大いに盛り上げていきたい。

加えて、寄宿舎研修部が計画している職員研修についても触れることにする。今年度は、担当舎生の様子を保護者に的確に伝える力や舎生・保護者の思いを受け止める力の向上を目的として、保護者懇談や個別面談を再現したシミュレーション研修「舎生を語る会」が企画されている。

親元を離れて寄宿舎で生活している児童生徒のことを誰よりも側で見ている私たちだからこそ、保護者と真摯に向き合い、将来についてイメージを共有することは必要不可欠だと考える。保護者に信頼され、時には思春期の子どもと保護者のクッションとしての役割を果たせる寄宿舎指導員でありたい。

３　まとめ

（１）成果と課題

本研究においては、豊かな生活の実現に向けたコミュニケーション力の育成について、組織的に考えながら実践を重ねることができた。棟や年齢層を超えた全体的な実践の場（双葉会活動）や、男子棟でのロールモデルとのつながり強化、女子棟での個にスポットを当てた取り組み等、まだまだ内容的には乏しいながらも成果と課題を見つけることができた。

また、コロナ禍であっても、新しい生活様式を踏まえて工夫することで、コミュニケーションの手段や方法が随所に見られるようになり、寄宿舎ならではの異年齢間での関わりも取り戻しつつあると感じている。

（２）今後の取組

３カ年の研究を経て、昨年度からは４つの分野からコミュニケーション力の育成をめざしたアプローチを継続しているが、中でも人権教育の観点をより明確にしたことで、児童生徒にとっても、私たち職員にとっても、取り組みの目的がはっきりしてきたように感じる。

コミュニケーション能力とは、「相手を理解し、人間関係を構築する力である」と結論づけるならば、まずお互いを知る機会を設けていきたいと考えている。行事や活動だけに限らず、寄宿舎生活のあらゆる場面において引き続きそのきっかけを数多く作っていきたい。

また、相手を知り、自分も知ってもらうためには、コミュニケーションスキルも伸ばしていきたい。特に、年齢の低い子どもたちは職員（大人）の会話を聞きながら言語や表現を獲得していくため、言語環境のさらなる整備にも努めていく必要がある。

前述した「ＩＣＴの利活用」の話題でも触れたように、言葉足らずや意味の取り違えによる対人トラブルは、今後も中学部・高等部生を中心に容易に起こりうると予想している。成長の過程とはいえ、速やかな解決につなげるための情報モラル教育や関係修復法等も提示していきたい。

最後に、コミュニケーション能力は、対人的なもの以外に「自問自答する力」も含まれるのではないかという観点で「セルフケア」について触れてみたい。

今、自分に起きていることが些細なことなのか、重大なことなのかが判断できることはとても大切なことである。例えば、「薬局で薬を買って飲むか、病院に行った方がよいのか」という状況では、あまり悩まずに判断できるであろう。これが対人問題になると、判断がより複雑になり、一人で考え込んでしまうケースも生じてしまう。側に信頼して相談できる相手がいれば、すぐに安心して連絡できる相手がいれば、このような状況は避けることができるのではないだろうか。

自分を大切にする、自分に目を向ける、そんな余裕は「安心できる人間関係」から生まれ、そして相手へのやさしさや思いやりへとつながる。その基盤となるコミュニケーション能力について、今後も本校のみならず多くの方々と意見を交わし、深く考えていきたい。